流通科学大学論集－流通・経営編―第 20 巻第 1 号, 79-93（2007）

聞き書き・高度経済成長期の清酒メーカー（6）

―野球部と醸造部―

An Oral History of *Sake* Brewer in the High Economic Growth Period（6）

－Baseball Club and Production Section－

石川　道子*、加藤　慶一郎†

Michiko Ishikawa, Keiichiro Kato

伊丹市の清酒メーカー小西酒造株式会社の野球部は、当初は同業他社との親善試合がその活動の軸であったが、昭和 30 年代に入り、同社の業容の拡大が進むなか、本格的な社会人野球のチームへと発展した。プロ野球経験者の入部もあって、全国大会に出場するほどの強豪へ成長を遂げた。しかし、その後清酒業界および同社の業績が低迷するとともに、野球部の維持も簡単ではなくなり、平成 11 年、やむなく休部とした。

キーワード：社会人野球、清酒、小西酒造

Ⅰ．解　題

我々は高度経済成長期における清酒メーカーに関する聞き取りを行ってきた[1)]。今回も兵庫県伊丹市に本社を置く小西酒造株式会社 OB の方にご高配たまわった。お話を伺ったのは、主として同社の醸造部に所属されていた松村知信氏であり、聞き取りは 2007 年 2 月 9 日に伊丹酒造組合において実施したものである。

これまでの調査とやや異なるのは、従来のように社の業務に限定せずに、野球部のことについてもご教示いただいた点である。南海ホークスを経て小西酒造へ入社された松村氏は、同社の野球部にも創設にも関わっておられ、当時のことを活き活きと語って下さった。

小西酒造野球部は創部の頃は同好会的な色合いが若干あったようであるが、硬式へと転じるとともに、都市対抗大会に出場を果たすほどの全国レベルの強豪となった。その後、清酒業界の不振を受けて休部を余儀なくされてしまい、はからずも日本の企業スポーツの盛衰と軌を一にすることとなった。さらに残念なことは、松村氏が収集した初期からの新聞切抜きなどの部史関係資料は、それが保管されていた西宮工場の閉鎖時に散逸してしたことである。こうした意味でも、今回の松村氏から貴重なお話を伺えたことに感謝したい。

* 神戸大学文学部地域連携センター　〒657-8501　神戸市灘区六甲台町 1-1

† 流通科学大学商学部　〒651-2188　神戸市西区学園西町 3-1

（2007 年 4 月 14 日受理）

©2007 UMDS Research Association

【松村知信氏の略歴】

昭和 24 年　南海ホークス入団
昭和 25 年　小西酒造株式会社入社（西宮営業所醸造部）
昭和 27 年　同上総務部（軟式野球部入部）
昭和 30 年　同上醸造部
昭和 33 年　硬式野球部創部（マネージャー兼選手、日本社会人野球連盟兵庫県支部加入）
昭和 39 年　野球部退部
昭和 45 年　小西酒造生産本部第一課長
昭和 50 年　同上生産本部次長
昭和 54 年　同上東京支店次長
昭和 61 年　同上伊丹支店長
昭和 62 年　同上総務部副部長
平成　4 年　定年退職

Ⅱ．南海ホークス、阪急ブレーブス、小西酒造野球部

1. 入社以前

昭和 6 年 3 月 8 日に播州赤穂（兵庫県赤穂市）で生まれました。家は農家です。兄弟 7 人の一番末っ子です。戦時中の昭和 16 年は小学生やったか、戦時中に赤穂中学の入学試験を受けて入りました。赤穂の坂越に生島という原生林の大きな島があって、3 年の時に学徒動員でその対岸にあるニチボーに松根油を作りに行きました。

2. 南海ホークス入団

戦後、野球ができるようになって赤穂中学、今は赤穂高校ですが、そこで草野球をやっていまして、昭和 21 年、私が 4 年生の時に野球部が復活して入部しました。あの時分の中学は 5 年制でした。当時は甲子園もやっていましたが、赤穂中学は甲子園に出られるような学校じゃありません。

昭和 23 年に尾崎（赤穂市）から塩崎君というピッチャーが巨人に引き抜かれました。いわゆる「あなた買います」ですな、その時分の言葉でいうと。彼はあの地区では第 1 号でしょうね、プロ野球に行ったのは。で、その翌年の 24 年に私は南海ホークスに入りました。南海ホークスに知り合いもあり、私は学区制で上郡高校に転校して 3 年生で、その時バッテリー組んでたキャッチャーの近藤さんという人と一緒にテストを受けに行きました。幸か不幸か私は合格して入団しました。監督は山本（鶴岡）一人です。

3. 入団して勘当

僕は出てくる時に、親父が頑固もんで、野球なんて昭和 24 年で誰が商売になると思いますか、（そのため）私は親から勘当されたんです。兄貴が大学まで出て勉強してましたから、お前はということです。

勘当でも構わなかったんで、俺は俺の好きなことをしていこうと思いました。お袋は泣いてましたけど。ちょうど姉が芦屋に住んでいて、その旦那さんが「これからは野球も面白いかもしらんなぁ」ということで、そこから居候で中百舌鳥まで通っていました。

同期でいうと岡本伊三美さんがいました。昭和 24 年入団です。京都洛陽工業高校ですかね。同じ京都で種田、和歌山の橋本から田中一郎とか、後に日本選手権だけで勝ったピッチャーの服部とか。みな引退が早かったです。遅くまでいたのは岡本と田中でした。有名な人で言えば岡本伊三美でしたね。近鉄監督、球団社長までしましたから。評論家の中でも良いし。出世頭です。

4. 復興期のプロ野球

戦時中から戦後は六大学野球が人気でした。なんと言っても神宮の森ですわ。早慶戦といえば 4 万、4 万 5 千入りますから。関西六大学といえば関関戦で、すごく人気が出ました。六大学から今度は年 1 回だけの都市対抗が花で、プロは復員してきた戦前の選手が大分顔を出して、人気がちょっと出だして、2 リーグに分裂しましたが、その時分でもすごい人気では無かったですね。

僕が覚えているのは、分裂してセ・パ分かれる以前の 1 リーグ制の時でも地方に試合を売りに行ってました。というのは、東京なら後楽園、名古屋、甲子園、西宮の 4 球場でしょ、使えるのが。それに 8 チームしかなかったから、同じカードばかりなので地方から来てくれという声がかかって、巨人―阪神ならいくらとか興業主が地方にいたわけです。ゲームを買うわけです。で、巨人―阪神 1 試合いくらとか、巨人―南海ならいくらとか。お客さんがたんと入れば儲かるわけです。そうしたら地方の興業主から 500 円の大入り袋をくれましたよ。僕らは甲府で巨人とやった時それをくれました。それを覚えていますよ。

遠征の時は列車の座席の下でした。4 人掛けでしょ、2 人が足を伸ばして、僕らは下でした。寝台列車が有っても取れないし、特急というのは本数が知れてますので、あって急行です。僕らは大阪から後楽園まで鈍行でいったことありますよ。9 時間掛かります。網棚で寝ましたよ。ユニフォームなんか入れている巻きバッグを広げて、その下で寝たりしました。

それぐらいしないとというか、大事にしてこそ私らも使ってもらえるんです。飯田徳治さんなんかバットを 15 本から 20 本以上持って来るんです。それを僕らが担ぐんです。キャッチャーのプロテクターも持つんです。今みたいなトラックはないですから、みな持ちます。キャッチャーには世話になるからとレガースやらプロテクターやらをみな自分で持ってました。

試合が終わって旅館に帰ってお風呂では背中流しです。靴下とかユニフォームとか全部洗います。宿のお姉さんに洗わしたらええいうようなもんですが、実際にお願いしたらどない言われるか。「ボンら洗ろうたげるよ」と言いますけど、怒られるということです。縦社会です。その代わり可愛いがってくれます。ファンからの到来物なんか右から左です。果物なんかない時に甲州行けばブドウをたくさん食べました。風呂の中で一箱食べたことを覚えていますわ。あの時分、試合でホームランを打つと 1000 円くれるんですよ。ホームベース踏むと同時に、連盟からのご褒美のお金を審判から受け取るのです。昭和 24 年の 1000 円といえば、大学の初任給が 3000 円以上というところはそうはなかったです。すると鶴岡(山本)さんが「おい徳」と飯田徳治さんから受け取って、「ほい坊主」と言ってそれをくれるんです。それを 3 人で分けるんです。一人 333

円です。それだけあれば、5 円でうどんですから。そんな時分です。千日前通りなんか、南海ファンがおりますので「うち来い」と言われて行くと、えらい大きなお好み焼きをタダで食べさせてくれるんです。

5. 社会人野球へ

オープン戦で春の遠征の時淡路洲本の三熊（みくま）公園の球場開きというのがあって、巨人と南海がそれに行ったんですよ。当時は明石から淡路の岩屋まで船です。明石球場で一生懸命練習して、汗かいて時間が無くて着替えもせず、淡路に渡る船に飛び乗り、暑いから船のデッキにおったんです。それで冷えて、三熊の旅館に泊まって、次の朝顔を洗おうとしたらもう手が曲がらない。冷えで炎症を起こしてしまっていた。汗かいてそのままそのシャツを着て、それで潮風にあたったものですから。船の一番上に上がって「涼しいわー」ってやってましたら 1 発ですわ。次の日は顔も洗えない。軟骨が炎症を起こしていて歯ブラシも持てなかったんです。（袖をまくって）今はこうやってメスをいれて縫っていますが、もう直らない。

ところが淡路ではもう先発を発表していたものですから放らないかん。けどどうにも投げられない。「何しとんやお前」と言われましたけど、もうボールが放れないんですよ。1 番は小松原さん（巨人のレフト）という人ですが、投げたらカキーンとホームランを打たれました。もう変化も何もない棒球ですから。その時、松井さんー大洋ホエールズの前身マルハの江藤・松井のバッテリーでしたが、南海に引き抜かれて在籍ーに「何しとんや。おまえ上がってるのか」と言われたけど、でもどうにもならない。3 回投げて 3 点取られました。それで、実はこれこれというと「どうして言わんのや！」ということになりました。

当時、治療といえば温泉治療と電気治療です。別府の帯刀さんという電気治療で有名な方のところに行きましたが、結局昭和 25 年の契約時にはもう契約できないということになりました。その頃、プロは全部社会人野球を紹介してくれるんです。プロの球団も紹介してくれました。社会人野球の松谷化学は南海を辞める時に連れて行かれました。社長にも会わせてもらいましたし、和田専務にもお会いしました。電電近畿も中ノ島にあってそこに連れて行ってもらったんです。

でも、やはりもう一度プロのユニフォームを着たいという思いがありました。私の親戚の知り合いに大連から復員して来た人で、戦中から満州鉄道の監督していた浜崎真二さんという人が―僕の知っている頃はもう阪急の監督でしたが―たまたま僕のピッチをちょっと見ていたらしいんですよね。それで、実はこれこれというと、「それじゃあ遊ぶつもりで来いや」ということで阪急ブレーブスへ練習生として通っていました。

ところが治らない、どうしても治らないということで、阪急さんが小西酒造さんと繋がりがあって、小西さんに来ることになりました。阪急と小西さんの繋がりは非常に強く、小西さんがあるために阪急は伊丹線を引いたとも聞いています。小西には当時白井貫二さんという専務さんがおられて、その方が県立伊丹中学で野球をなさっていたようです。もう亡くなられて我々の大先

輩ですが、その方が野球がお好きだったようです。

6. 阪急ブレーブスから小西野球部へ

当時、西宮市に「西宮酒造家十日会」というのがありました。十日会は西宮の日本盛さん、大関さん、辰馬本家さんなど西宮郷と今津郷の酒造会社の会です。その十日会でも野球をやろうかという空気が高まっていたんじゃないですかね。もしアマチュアで野球もし、会社勤めもしたいんやったらどうかと。西宮工場に連れて行ってもらいあいさつをしました。そしたら「仕事する気はあるか、うちは野球だけやないぞ。仕事もあるけどどうや」といわれて、「はい、仕事もします」と言いました。実はうちの親父も酒造会社との繋がりがあり、昭和 25 年の 12 月に「さっそく働かせていただきます」ということで、昭和 25 年 12 月 1 日から来いということになりました。南海はもう退団してますので 12 月からなんです。それで翌年の 4 月から正社員になりました。

親父は小西に入って帰省した時具合が悪かったのですが、「伊丹の小西酒造にいれてもろた」と言った時、「うん。よっしゃ」とそれだけでした。親父は嘉納さん（菊正宗、白鶴など）とか知ってましたから、「皆にかわいがってもらえ」と言って、私は「ほな帰るわ」言って帰ったんですが、その 2 日後に他界しました。そこまで最後に納得させることができて良かったです。

7. 清酒メーカーの対抗戦

私が入った頃に十日会では、白鹿の社長辰馬さんが昔の甲陽中学校出身で野球好き、小西の白井さんも伊丹中学校でやってたということで合致して、野球大会ができました。白井さんから「従業員が野球をやりたがっているけどどないします」と話を出し、それならということで今津（西宮市）の工場の隣に空き地があり、そういうとこでもよければとここを使うことになりました。当時は 50 才 60 才の従業員を借り出さんとアカンぐらいメンバーがいなかったんです。私が入ったのはこのような時でした。その後で昭和 27 年の暮れに阪急ブレーブスと契約が切れた北村、石田、土屋、万谷（まんたに）の 4 人が小西に入って来た。北村さんは監督も長くされました。石田はピッチャー、土谷はキャッチャー、万谷はファーストで、彼は 1 メートル 85 センチくらいあったかな、南海から同期の高村投手と、高校から多勢入社しました。

十日会は春に試合をやっていました。秋にもということになり、（仕込みを控えた）忙しい時に何言ってるんやと言いながらも、士気高揚のためにええやないかということで、秋の早めにやろうということになりました。当時は夏になれば酒も出ませんし。始めはお年寄りも出てきましたが、ところがお酒も売れ出してくると若い人が会社に入り、日本盛や大関さんも野球チームをということになり、十日会が発展したと同時に、灘五郷の大会ができました。

8. 新聞社主催の大会に発展

当時は軟式でした。醸界新報と醸界タイムズが主催者になり、春・秋やるようになりました。これが昭和 28 年のことです。醸界新報が秋、醸界タイムズが春の主催者でした。灘やったら白鶴、沢の鶴、菊正、福久娘さんなど沢山あります。15 チームくらいあったと思います。西宮でも、

うち（白雪）、白鹿、大関など。そこで大会で優勝すれば神戸製鋼の酝卸用の琺瑯タンクが副賞で、ちょうど木の樽から鉄製タンクの琺瑯引の神鋼ファウドラーがつくった物に代わって来た時です。

そこで優勝旗と副賞の酝卸タンクを持って帰ると、白井さんが「そのタンクの帳簿価格幾らや、2 万 5000 円やろ、そんなら 2 万円に負けておけ。会社が 2 万円で買うたるわ」ということで、その 2 万円が野球部に入ります。だからみんな必死です。というのも当時部費として 1 人が月に 300 円も払っていたんですから。月給 3000 円か 3500 円の時の 300 円ですから大きいですよ。昭和 28 年ごろだとそんなもんですよ。

でも、この頃は給料のほかに現物支給がありましたね、野球部だけでなくて全社員に。階級によって酒 3 本あるいは 5 本くれます、ひと月にです。これを料亭に持って行くと、当時の酒税が 1.8 リットル 1 級で 920 円ですよ。酒は売値は高かったですよ、酒がなかったんですから。この現物支給の酒を売って貯金して土地を買って裕福に暮らしている人もおられますよ。僕なんかも会社からいただく給料は給料として全部貯金でき、お酒を売ったお金が小遣いでした。ほぼ同じぐらいの額でした。こうした現物支給の特典が昭和 31 年くらいまでありました。

9. 草野球、「軟式の雄」、ノンプロ

十日会の最初の大会のころは、うちは 60 才に近い人が出て来て、ボールが飛んで行ってもジーッとしてて取ってくれへんのやから。それは草野球もいいところでした。

昭和 29 年には北海道の国体に行きましたが、その後 30 年に西日本大会があり優勝しました。四国の丸亀市でした。それでごつい団扇をもらって、「小西酒造」と書いた。団扇の産地ですから。その翌年 31 年に九州八幡球場の西日本大会で優勝しました。32 年の天皇杯が岐阜長良球場であって優勝戦まで行きました（写真 1）。優勝戦は川崎市水道部でした。今でも忘れられません。ここは何年か天皇杯で優勝している強いチームでした。うちのピッチャーは海津選手でしたが、球は速いがコントロールが悪くて、あっち向いてこっち向いたらもう満塁ですわ。そののち彼は落ち着いて名投手になりました。

写真 1　昭和 32 年、岐阜長良川球場で行われた天皇賜杯決勝戦後の表彰式
右から海津、松村、森、井上、米蒸の諸氏

うちのチームはその内「軟式の雄」になり、そうすると部員の中から、軟式はつまらんと。みんな高校時分は硬式やってた連中だから、硬式やろうやという声が出て来た。全国で常にトップク

ラスじゃないかということでした。そうすると白井専務が「身の程を知れ、井の中の蛙のくせに」と言いながらも、もともと野球部を始められた方なので、それほど言うのならと昭和 33 年 3 月に日本社会人野球協会に登録しました。大関さんなども高校出のいい人を引っ張って来たりして、昭和 29 年に日本軟式野球連盟に登録していました。

当時は神戸市で 1 チーム出られました。で、うちは魚崎に工場がありましたので神戸市に登録しました。神戸市以外の兵庫県チームは近畿ブロックになり、そうなるとすごいチーム、松下、住友金属そのほか日本のそうそうたるトップクラスのチームがいますから。

それで神戸市で出たところ勝ってしまいました。三菱、川重、神戸銀行に。昭和 33 年、登録した年にです。ですから当時の新聞は「ホールインワン」って大きく出て、そりゃ大変でした。ところが、神戸市の三菱、川重などが怒ります。「小西のどこが神戸や、あれは西宮か伊丹やないか、なんで神戸に入れたんや」と当時の支部長・理事長に食ってかかったんですけど仕方ないですよ、もう大会に出てるのやから。

その時私はマネージャーをしてました。球界の知り合いも多いからということで仰せつかっていたんですが、ごっつい苛められたんですわ。証明書に当たる神戸市長の推薦状をくれないんです。市長の推薦状を持って行かないと本大会に出られないんです。で、仕方ないから毎日新聞へ行って「今さら何を言ってるんや、固定資産税払ってるやないか」と。

その時に早稲田を卒業された井口新次郎さん―和歌山中学から行かれた人―が当時は毎日新聞を退かれて、近畿地区野球連盟の理事長をしておられたので、この人を頼って「実は困っている、お助けを」と酒を持って頼みに行ったんです。豊中のお宅まで訪ねました。そうすると前栽で松の木を剪定している人がいて、植木屋のおっさんだと思い「おっちゃん、ここの旦那いてはりますか」と聞いたら、「なんや、オレや」とご当人なんです。それから助けてもらいました。「魚崎に工場があって固定資産税も払ってるからお前ら受付たんやろ、今さら何を言うてるねん」と。

写真 2　昭和 33 年、初の都市対抗出場（第 29 回）
ベンチ上で試合開始を待つ小西酒造応援団。右から 1、3、4 人目はいずれも楠公さんの扮装で、5 名とも慶應義塾大学応援団学生。

しかし、川崎重工やら新三菱にしたら腹が立って仕方がない。ポット出に負けてということで。ところが兵庫県の鐘化、富士鉄広畑、そんなところは反対します。そんなのがこちらへ来たらこっちが困るから。二出川という富士鉄の選手が「始めに受け付けたのが悪いんじゃ」と言ったり、鐘淵化学の山本治（はる）も「近畿ブロッ

クの方ではうちらの方に来てもらったら困るで」とか、そりゃ大変でした。それでやっと神戸市長が証明を書いてくれたのが期限の 2 週間前くらいでした。これをもって小川正太郎さんの所に行かなければ出られませんから。井口さんが小川さんに証明持って行くのでよろしくと電話で言ってくれていたようです。

それで出てくじで当たった対戦相手が熊谷組。1 回戦。みんなから天罰が当たったんやと言われました。熊谷組ったらその時分世界のチャンピオンですから。有名な六大学の選手が入って、オールジャパンを組んでも殆ど熊谷組のメンバー、というようなチームなんです。世界選手でも優勝しています。その次の年たまたまうちのチームが初めて行って、それで 1 回戦熊谷組と当たってしまって。みんな試合する前から「帰ろか」と言うてました（写真 2)。

10. 素人監督の下で一致団結

監督さんの西島さんはまったくの未経験者ですが、工場長で自分の部下が選手なので監督になった人です。選手が「親父、監督やれ」と言ったんです。選手の大半が瓶詰め工場の配属だから、親父にやらしておけば選手の方も無理が利くと考えたんです。会社から出すものを出してもらう、つまり待遇に関しては工場長が監督の方が良いですから。

野球のイロハを知らないんですが、一応監督なのであれこれサインを出します。が、監督とは別に選手は選手で別のサインを決めていたのです。ですから、川重や三菱の選手が「あんたところのサインは分からん」と言ってました。彼らは監督の動きに注目してましたから、監督の動きとヒットエンドランとかの作戦が一致しないんです。

だけどそこで結束できたんです。自分らでやって勝とうという風になりましたから。プレイするのは選手やということです。他の社会人と違って、ノンプロでは異色でした。もうないでしょうね。ですから新聞社のほうも記者が来て「これは強いのが当たり前だ」と言ってました。

11. 勝ったら経費激増

ところで、昭和 33 年、後楽園で、4 対 1 で熊谷に負けましたが、あの熊谷組を 3 点で押さえたというのはもの凄いことでした。それから海津は上り調子になり、いいピッチャーになりました。当時は先発したら試合が終わるまで投げるのが当たり前でした。ローテーションは有りませんでした。負けても勝ってもピッチャーはおまえに任せるぞというような主義の時代でした。

昭和 36 年にまた出ました。この時は 1 回戦で日生とあたり、またこれも「えらいところをクジ引いたな」と怒られて怒られて。ところが日生に勝ちました。それでえらいこっちゃということになりました。次に常磐炭鉱にも勝って、「小西旋風」と言われました。その次の三菱名古屋に負けました。この三菱名古屋へは神戸三菱が負けた腹いせで、小西チームの選手資料を全部送ってたんですわ。兄弟会社だから。うちら酒屋のチームはそんなものほかに何もない。

強かったですが、1 回大会に出るとお金がごっつい掛かります。都市対抗は戦前から東京ですから変えられない。勝ったら帰れない。36 年のように 3 回戦まで残ったりすると 500 人、800

人というこちらから行く応援団、バス 50 台の何のという。それに宿泊費、食費、勝ち進んで往復 3 回やると 1 億、2 億というお金です。応援団はこちらで連れて行きますから。

小西の販売の主力は東京でしたので、初めて出た時など問屋の国分（国分株式会社）さんやら日酒販（日本酒類販売株式会社）さんとかからすごい応援に来てくれました。それと酒もどんどん売ってくれました。ですからボンボン売れました。営業マンでも「大会に出るのか、それなら今度何十本入れとけ」という感じで協力的にやってくれました。

12. 悪いけど、やっぱりスポーツマンや

今は西宮でも軟式もお持ちでない酒屋（清酒メーカー）さんがいますが、御影では菊（菊正宗）、白鶴は神戸市の全日本軟式野球連名に登録して今も活動されてますよ。そうしないと社員がいいのが入ってこないんです。やはりスポーツマンは臨機応変にやります。菊正（菊正宗）でも、白鶴でも役に立つといっています。お互いに協調もしますし。悪いけどやはりスポーツマンやって言ってます。

今でも白鶴、菊正は神戸市の野球大会でもかなりの成績を残しています。硬式に変わったのは小西酒造だけですが。最初の「十日会」とかは、野球が好きでも硬式に登録されない人たちが全国軟式野球連盟に登録して、西宮支部に登録されてやってました。あとは硬式を辞めた人も入ってました。野球部は軟式、硬式と 2 つあったんです。今は両方ともないですが。

13. やむなく休部へ

休部については OB は余り意見を聞かれませんでした。会社に莫大な貢献を残しているはずなのですが。あれだけ軟式時分から酒の出る時期になんかあったら野球部がこうしましょうといって残業してきたのに、1 銭ももらってませんから。ホンマに野球部が 20 人で一致団結して、焼酎の壷を菰で巻くんですが、絶対仕上げないと帰らさないんですから。それが四国の宇和島から船が今津の浜へ着て 300 本とか買いに来るんですが、練習が終わってから仕上げをやるんです。また何日かしたらまた注文が来るんです。その頃は上り調子で、矢でも鉄砲でも持って来いという時期ですから。その頃は菊正であろうと白鶴、天下の白鹿さんであろうともなんだという、飛ぶ鳥を落とす勢いでしたから。1 年経てば 3 万、4 万石とドンドン増えて行くんですから。それで今はよう儲けていないんですから何をしてるこっちゃと腹が立って、腹が立って仕方ないです。

野球部休部は平成 11 年です。震災の年は代表で出ています。震災後 2 ヶ月か 3 ヶ月か練習できなかったんですが、東京に行ってます。ああいう時は馬鹿力を出すんです。谷中（たになか）はその 2 年前に西武へ行ったんです。その後阪神へ行って今は楽天にいます。鈴木は松下電器へ行きました。

Ⅲ. 多忙を極めた醸造部

1. 醸造部の仕事

西宮工場の現場は 1 年位で、醸造部という部署でした。醸造部というのは事務系等でお酒を造

る指示とか、造っているお酒を税務署へ報告するとか、出荷したお酒の酒税の計算とか、今年はこういう酒造りをしようとかといった造りの計画を立てる、今の生産本部と一緒です。

野球部のほかの人は瓶詰め、つまり現場です。出荷とかそういう所です。だから私たち醸造部はここ（伊丹市の本社社屋）ができた昭和 45 年にはこっちに来たんです。彼らは西宮に残ったんですけど。ここに生産部が 2 階にできて、醸造課は第 5 課まであったんです。で、1 課が酒税とか生産とか、2 課が移入酒、3 課が資材関係とか分かれていました。

2. 醸造部での仕事始め

小西酒造に就職したものの私はまったく酒が飲めません。ところが、仕事は現場へまず入れ、まず現場を知らないかんということで、蔵の中に入ると、タンクです。ホースで酒のタンクを洗うんですが酒の匂いがプンプンです。酒を出したあとのタンクを洗えというんです。それはどうするのかというと、ハシゴを掛けて目張りした蓋を半分上へ持ち上げて開け、つっかい棒をして、その間からタンクに入るわけですが、入ったら酒の匂いがプンプンします。ですから、ものの 5 分もおられません。タンクの下のほうに酒を出し入れするノミっていう穴が空いていますので、そこへ行って金魚みたいに外の空気を「ふわぁー」と吸ってましたが「たまらんから、助けてくれーっ」て言っても、50 石（9 千リットル）位もあるタンクですから、高さが 2 メートル 40 から 50 センチあり、出ようと思ったら飛びつかないと出られない。腕力で体を持ち上げるまではいいんですが、足を持ち上げて跨がる時に、つっかい棒を蹴るんですわ、そしたら蓋が落ちて来て、頭は打つわ、体は打つわ、もうそれで午前中ダウンですわ。昼からは寝てました、寮で。「酒飲めんのか」と言われて、「兄弟もだれも家中飲めません」というと「仕方ないなー、練習してもらわんと」と言われました。

それからどうしたろかと思っていたら、タンク洗いの時は、誰も教えてくれないし、始めに水ではなくてお湯を入れて、ある程度アルコール分を飛ばしてからやってました。先輩は教えるというよりは自分で体験せぇという様なもんですわ。まぁ現場知れということでしたが、タンク洗いには参りました。

ほかに「桶算」もやりました。酒税があるからなんですが、1 日に桶があの時分だから何十本も瓶詰めに動きますし、手入れもありますし、桶から桶へと動かすと計算しないといけませんから。寝る間がないです。桶は 1 本 1 本サイズが違いますから、これに 2 ミリ単位で各桶ごとに 2 ミリ単位でいくら入るかを税務署立会いで承認されて使用させてもらうんです。タンクの酒の量を 2 ミリ単位で計って、どれだけの酒が残っているかを計算します。流量計を使うのはだいぶ後で、それまでは採寸でやってました。桶を採寸して、計算するやり方があったんです。木の尺があって、「木型」があって桶に渡して、桶を渡して木の字型に尺が入っていて 2 ミリごとに計るんです。工場に税務署の人が来ていて、その人の立ち会いがないと酒の封印もできません。それぐらい間接税のなかでも酒税は大きかったです。西宮はアサヒビールやニッカのほか酒屋さんが

多いので酒税がすごかったです。川鉄などもありましたが、お呼びじゃなかった。

3. 練習は閑散期に

この時代の野球部は練習が終わると、焼酎の梱包です。容器は 18 リットルの陶器の壷なんです。注文が四国そのほかからボンボン来るので、残業して急いで梱包をやらないと間に合わない。それで野球部の連中は練習から帰って来ると、ほかの人は帰ってください、あとはやりますからと、壺の仕上げに部員全員がかかって 2 時間なり 3 時間なり梱包作業をやるわけですよ。キチンと作り上げて翌朝の出荷にぴちっと間に合わせる。そんなのがずっと続きましたね。

野球部の部員は西宮工場に配属されていました。仕事は他の従業員と同じ定刻に始まって、冬は 2 時から練習させてもらいます。秋春は日が長いので 3 時からとかになっていました。練習から帰って来て残りの仕事をきちっとやります。仕事は 8 時間、間に練習が挟まっているだけです。8 時間とはいえ、そんなもん、8 時間どころではありませんでした。そのころの社会人野球の規制にもありましたが、うちは純然たるノンプロ、社会人野球でした。よそは野球だけでいいところも今はありますが、うちは仕事は瓶詰から色々力仕事を始め全部やります。

毎月灘五郷酒造組合と税務署に自製酒とよそから買ってきたお酒と、それに対して水をどれだけ加えたか、そういうデータを全部出さなアカンのです。出荷したお酒については 1 級でいくら、特級でいくら、度数でいくら、酒税でいくらと 30 日分を出さなアカンのです。税務署に出して、翌月に税金何ぼ払いなさいと税務署から来るんです。それを翌月にメーカーから払うんです。国はもう早く回収したほうが得なんですから。だから 12 月なんかだと寝ずにやらないとおっつかないんです。昭和 28 年に結婚して所帯もって、10 月の末から 12 月の 31 日まで何日帰れたか。日曜も休みなしでやるか、それか家に持って帰って寝ずにやるとかそんな感じです。ですから近所の人から家内は「悪いですけど、お宅お妾さんですか」と言われたそうですよ。

その代わり、夏は酒が出んからというか、出ても知れているから計算も少なく、野球をやらせてもらいました。3 月から 10 月の始めまでです。野球ができるのは。それ以降はできんのです。忙しなって。練習しようかといっても各部署の連中が集まれないのです。野球部の連中は西宮に居たんですけど。部員は全員西宮の工場に集結していたのです。それも全員現場の瓶詰め工場などいました。だから彼らはチームワークも良うなりましたよ。お互いに助け合って「お前、無理しとんやろ、ちょっと寝とれ」といって、そこで寝かしといたりしました。

4. 総務部へ一時異動、自動車免許を取得

その後、昭和 27 年から一旦総務へ行きました。当時はここに自動車を運転する者がいなかった。西宮工場の白井専務さんは、当時、兵庫県酒造組合の理事もなさっており、とてもお忙しかった。また、当時辰馬本家酒造（白鹿）の社長辰馬力さんが兵庫県酒造組合連合会の理事長であり、全国酒造組合連合会の会長でもあられました。白井さんがすごく頭の切れる人でしたので、辰馬さんが灘の理事会にしても何にしても頼りにされ、大阪国税局に行くとか大変忙しかったの

です。当時は自転車です。車なんてなかったですから。それで車を買いたい、では免許証がいるということで、「若い松村免許取れ」ということで私が免許証をとって、車を買い、私はほかの仕事をやりながら専務の送迎を総務の仕事としてさせていただいた（写真 3）。

写真 3　昭和 28 年当時の社用車
伊丹本社前のフォード製マーキュリーと松村氏

5. 醸造部復帰、ソロバンに苦労

その後、昭和 30 年に、私は総務から醸造部にかわりました。醸造部は酒税の計算があって、若い人が必要だということでした。ソロバンできるのかと聞かれて「戦時中にそんな余裕なんかなかった、できない」というと白井専務が「マツ、ソロバン習いに行け、紹介したるから」と。それでソロバンを習いに行って、始め小学 1 年生の子と一緒です。腹が立ちますよ。私ら野球をやって手が震えていっぺんに玉が二つぐらい上がるのに。雨の日には私は免許があるので子供を送ってやるのですが、「ただいまー。このおっさんな―ソロバンできひんねん」と言われて困りました。カリカリくるんですが仕方ないですよ。事実ですから。だから一生懸命習いましたよ。業務終了後、夕方に 7 時からとか 8 時からとか習いに行きました。ですから野球の練習もそれまでに終わらせてもらって行きました。

夕方、もう会社の業務が 5 時で終わってから、7 時とか 8 時とかから仕事は再開します。だから野球の練習もそれまでに終わらしてもらって。まだ当時計算機ないですから、ソロバンしかないんですもん。後にタイガー計算機が出たんです。ジャラジャラ回すやつです。あのタイガーのです。それでもやっぱりそんな機械を持って蔵の中に入られしませんから。あんな手回しの重たいものは無理です。やっぱり事務所に座ってやるなら宜しいですよ。蔵の中ではそんなのできないのです。蔵の中に入って桶でお酒のできた量なんかを全部はじくんです。結局、税務署員が毎日検査に来るんですから、その税務署員に「このタンクは上から切りいくらで量が何ぼ入ってます」と全部計算して桶帳というのを 1 本ずつ作っているんです。それを見てもらって確認してもらって判を押してもらうんです。そんなもん暗算ではできないんです。帰って事務所なら机で機械でできますが。1 ヶ月、1 ヶ月どうお酒が動いたか集計しないといけないんですが、それはソロバンではやっていられないんです。これは計算機です。

6. 税務署員殴打事件

税務署から来て夏に「タンクの蓋を開けろ」という馬鹿がいて、カチィーンと来たんですよ。夏場にタンクを開けたら酒が腐ってしまいますよ。春先に火入れして、自然冷却させて密封しているのですよ。これを「開けろ」というのです。その方は私よりも若かったです。高校出てから税務大学校は 2 年ですから僕らより下です。だから余計です。「分かりもせんと」という感じで

す。それでもう腹が立って「どこまで責任持つんや、おのれ」とやったんです。そしてぶん殴ったんです。

当時は白井専務が親分だったんです。「手を上げたことはいかん、口で言うんはいいが、お前はいかん」とすごく怒られました。だけど会社を思うと、蓋を開けると何百万の損害です。税務大学校を出たての者に何が分かるかということです。18 キロリッターの原酒ですよ。それがポイになるんですから。そんなことで会社に迷惑をかけられないという、そんなことも分からんのかと言われそうでしたから。

それでも怒られて「今後お前がそういうことをしたら即座に首にする」と言われました。西宮税務署長に呼び出されて、専務が税務署長に頭を下げるのを見て、これはいかんことをした肝に銘じました。それぐらい税務署が権威を持っていました。当時私は 26、7 歳でした。終戦後 11、12 年たった頃でした。

だけどその人とは後で仲良くなりました。「俺が悪かった。勉強不足やった。よう教えてくれはった」と言ってました。そこで「税務署長にまで頭を下げてくれたりして、すんませんでした」と言ってね。あとは「こんな時にはどうしたらいいか」とか訊いて来たりしました。しまいには。「そんなこともうええやん。（ご自分で）勉強しいな」と遠慮しましたけど。それは仲良くなりました。その人が芦屋税務署や、神戸税務署に行こうと常に連絡をくれました。

7. 当時の商況—倍々ゲームー

当時、小西酒造の工場（酒蔵）は伊丹と西宮と魚崎とにありました。魚崎は 3 蔵で 3000 石、伊丹が 4 蔵、万歳一号・二号・長寿・南蔵、これで 6000 石。西宮が寿・内・新生蔵の 3 蔵で 5000 石でした。大体ひと蔵 1300～1500 石位でしょうか。ところが東京でのお酒の人気があって、西宮の酒をくれというのが多かったです。それで西宮の酒を造れということで西宮に鉄筋の寿蔵ができ 2500 石くらい石高をあげました。

私が入った 25 年頃は焼酎はあるは、合成酒はあるは、焼酎でも 20 度のも 25 度のもあるはでした。ところがお酒は特級・1 級・2 級だけでした。結局、準 1 級を設定してからお酒がすごく出始めた。昭和 33 年ころから倍々になって行ったのかなあ。36 年には 3 万 6000 石出ました。

それから 1 年に 2 万石、2 万 5000 石とポンポン伸びて行って、昭和 47 年、48 年には 40 万石、43 万石まで行きました。大倉さん（月桂冠）が 67 万石まで行ったのかな。ですから灘では白雪(小西酒造)がトップになりました。その間、結局、白雪単独の 10 蔵ある造りでいっても元の石数が少ない。基準指数（原料米割り当ての基礎数値）が少なく、とても足りないということで、提携先を作って「桶買」をしました。提携先に技術者を送り込んで、こうしてください、ああしてください、といって未納税取引がはじまりました。多い時は 280 社くらい提携先があったと思います。九州から四国、遠い所では秋田、山形もありました。そうしないとお酒が集まりません、自分ところの能力は知れてますから。

8. 増産のために基準指数を買い集める

だからその基準指数を増やさないと仕方ないので―今はオープンになってますけど―買ってくるとか、なんかせなあかんということで、兵庫県の酒造組合連合会の前田さんに「これだけ桶取引をして、中小を助けているのだから恩典をくれ、そんなもんうちはえらい目をして売って来て、みな業界のために協力しているのだからなんか考えてくれ」と言って、元になる原料米を増やそうということで、東京にある中央会に前田さんと一緒に行って、その時に辰馬力さんから「えらい怖い人が来たな」といわれたりしましたけど。前田さんと私とでああして欲しい、こうして欲しいと言ったもんですから。「だから辰馬さんおたくも増えるやないですか。灘の大手がみな苦労しているから売れるんです。だから何とか方法を考えてください」ということで、中央会の会議にかけますとか何とか言ってかけてもらって、1 年 1 年辛抱して、桶取引してお互いに提携加配という形で原料米を増やしていったんです。基準指数も買いました。自分で株のように買っていったんです。1 指数 5 万円とかいう感じです。始めは 1 万円もしなかったんですが、みな買い出すとすぐ上がりました。

基準指数をあちこちから買いました。税務署行って登録してと、よう走り回りました。宮崎行って交渉して、社長に報告して OK をもらって、手付け打って帰って大阪局に申請して、それから熊本局に申請してという、指数を移動するのにややこしい昔からの仕来りもあって大変でした。

9. 業績が良過ぎて退部

こういうことがあって「もうお前は忙しすぎるから野球はやめとけ」となりました。昭和 39 年には辞めています。事務所で仕事しないとどうにもならなかったです。本当に寝る間が無かったです。冬の間は。悪いですけど、その頃は醸造部というのは若い人は私と石田という人の他はお年寄りばかりです。老眼鏡をかけて、卓上計算機もタイガーが使えないような人ばかりです。だから「女の子でもいいから雇ってくれ」といったんです。高校出の女の子なら計算機でもすぐ覚えてくれますから。女の子をいっぺんに 3 人増やしてくれました。それで出先へ「こういう問題出たからどうしましょう」と電話が来ますから「それは俺の机のどこに入っているから、ああしてこうして」と指示して、帰ってからそれを確認して、また出張に行くということでした。

当時は全社員が大変だったです。瓶詰め工場も大変でした。何しろ送る酒がないんですから。ずっと右から左です。西宮工場から運ぶトラックが、11 トン車が工場を 1 周するんですから。だから工場の女性さんがおにぎりを作って運転手さんに渡し、タバコが切れたら買いに行くんです。運転手さんには乗っててもらわないと困りますから。

片一方、大関さんは「どないなってんやろ」といってました。会社によって全然違うんです。それははっきり言ってすばらしい酒を造っていたからです。私はそれは今誇りに言えます。責任者だった白井貫二さんは当時「1 億円の鼻」と言われていました。昭和 30 年代のことです。それぐらい酒の良し悪しが分かる人でした。NHK の紅白の審査員にもなったりもした方です。

10. 東京支店へ

昭和 54 年に東京支店に行きました。7 年間です。営業に出されたんです。勉強して来いということです。次長としてでした。子供はまだ高校生だったかな。ですから単身赴任でした。子供はこっちですから。7 年間です。で、昭和 61 年にこっちへ帰ってきて伊丹支店。本社の中に伊丹支店があって、兵庫県と、山口県までと四国、沖縄県といったブロックを管轄していました。大阪支店が近畿の向こう、名古屋があって、東京支店があって、仙台があって、札幌があったんです。そこに 1 年、そのあと昭和 63 年に総務へ来て、社員研修の実施をリセットしました。社員全員に毎月唎を実施し、年間優秀者には社長章を出すようにしたり、日能やリクルートでの通信教育で免許取得を奨励して、卒業者に対しては費用を会社負担としました。他にも長寿蔵のブルワリーでは清酒製造工程の展示を検討したりしました。定年退職は平成 4 年でしたが、再開発を担当するため延長されました。

注

[1] 石川道子・加藤慶一郎「聞き書き・高度経済成長期の清酒メーカー（1）―清酒ブームと桶買いー」『流通科学大学論集　経済経営情報編』（第 15 巻第 2 号、2006 年 11 月）、同前「聞き書き・高度経済成長期の清酒メーカー（2）―経営機械化を中心に―」『流通科学大学論集　流通経営編』（第 19 巻第 2 号、2006 年 11 月）、同前「聞き書き・高度経済成長期の清酒メーカー（3）―食品部門の展開を中心にー」『流通科学大学論集　経済経営情報編』（第 15 巻第 3 号、2007 年 3 月）、同前「聞き書き・高度経済成長期の清酒メーカー（4）―電算化を中心に―」『流通科学大学論集　流通経営編』（第 19 巻第 3 号、2007 年 3 月）、同前「聞き書き・高度経済成長期の清酒メーカー（5）－清酒とトラック輸送会社－」『流通科学大学論集　流通経営編』（第 19 巻第 3 号、2007 年 3 月）。